

線路

破綻を信じることができなかつた我々は
破綻のさなかにあつて、なお
洪水の自然に引くのをただ、待っている

電車の窓を通り過ぎる、里山の斜面に咲く桜は
雨に汚れてうなだれながら、そらぞらしく笑みを浮かべている
まるでプラスチックの造花そのままに

だってそうじゃないか？
誰が好き好んで生の美しさを自ら踏みにじるものが
まるで手首を切って血にまみれるように

破綻というものはそういうものなんだ
ただ見ているしかない
茫然自失の中に流されてゆくしかない、と

疲れきって椅子にうづくまる、こいつ等を見るがいい
あの雨でぐしょ濡れになっている桜と
汚らしくぼろぼろになつてうづくまる桜と変わらないのだ

この電車が行き着く先なんぞ、知つたことじゃない
乗る前には、確かに行く先を確かめはするが
乗ってしまったら、もう、何処へ辿り付こうが構わないんだ

力の末期を見よ
この僕の中で折れ砕けた力のなれの果てを見よ
この電車の速さを遙か遠いものとした、その力の末期を

隣国では、こんな俺たちに向けて
石が投げられ、罵詈雑言が浴びせられているという
はん、何という大陸的な温情だ

今の今でも
破綻したことを信じられぬ我々だというのに
ただ、びしょ濡れにうづくまっている我々だというのに

(2005.4.12)